

2016年度夏学期「辞書を使おう」 ワークショップ実践報告

— 初中級～中級レベルの日本語学習者の辞書ツール使用を考えるために —

鈴木 智美

【キーワード】 辞書アプリケーション、スマートフォン、オンライン辞書、電子辞書、
句単位検索とコロケーション

1. 本稿の目的

本稿では、2016年度夏学期に東京外国語大学全学日本語プログラム¹「自律型学習コース」²で行われた「『辞書を使おう』ワークショップ」について、その内容を報告することを目的とする。ワークショップ参加者の主な日本語レベルが初中級～中級レベルであったことから、特に初中級～中級レベルの日本語学習者の辞書ツールの使用について考えていくための手がかりとしたい。

まず、第2節でワークショップの概要を記し、第3節でワークショップ1日目の内容について、第4節で2日目の内容について詳細に報告する。第5節でまとめと今後の課題について述べる。

2. ワークショップの概要

今回実施された「『辞書を使おう』ワークショップ」の概要は以下の通りである。

¹ 東京外国語大学「全学日本語プログラム」(JLPTUFS: Japanese Language Program of TUFs)は、交流協定校からの交換留学生、日本語・日本文化研修留学生、教員研修留学生、国費・私費の研究生、予備教育課程の国費研究留学生など、主として非正規の留学生を対象とした全学的な日本語プログラムである。初級から超級まで8段階のレベルがあり、2016年度秋学期現在計50の科目が開講され、1週間の延べ開講コマ数(1コマ=90分の授業)は計111となっている。(2016年度秋学期『全学日本語プログラム履修案内』より確認)

² 東京外国語大学では、2015年度よりクォーター制(4学期制)をとっており、春学期のコースは7月初旬に終了する。夏学期(7月中旬～9月)のうち、前半の7月中旬～8月初旬にかけて、全学日本語プログラムでは、成績付与や単位認定などを伴わない「自律型学習コース」が開講されている。2016年度夏学期も、会話クラスや日本語能力試験準備クラス、多読クラスなど、本ワークショップを含む計5つのコースが開講された。

- (1) 実施日時：2016年7月19日(火)～7月20日(水)
いずれも10:00～12:00(2時間)
- (2) 場所：留学生日本語教育センター棟303教室(CAI教室)
- (3) 担当教員：鈴木智美³
- (4) ワークショップの目的：
日本語で表現する練習をしながら、辞書の使い方を学ぶ
- (5) 参加者：全学日本語プログラム受講生延べ21名
(1日目12名、2日目9名)⁴
- (6) 参加者の日本語レベル⁵(1日目の参加者12名の内訳)：
100(初級)1名、200(初中級)4名、300(中級1)3名
400(中級2)1名、500(中上級)1名、600(上級1)1名
700(上級2)1名
- (7) 参加者の国・地域(1日目の参加者12名の内訳)：
イタリア3名、ミャンマー2名、中国2名、スペイン、ブラジル、
アルゼンチン、インドネシア、韓国各1名
- (8) 参加者に持参してもらうもの：
ふだん使っている辞書(電子辞書やスマートフォンのアプリケーション)
オンラインウェブサイトは教室のコンピュータで閲覧可能とした
- (9) ワークショップにおける参加者の達成目標：
 - a. 自分の辞書の使い方を振り返る
 - b. ほかの人の辞書の使い方を知る
 - c. 辞書の使い方の工夫を知る

³ ワークショップ当日は、東京外国語大学大学院国際日本専攻国際日本コースの泉大輔さんに実施補助をお願いした。また、本ワークショップ開設・実施にあたっては、全学日本語プログラム運営委員会、および自律型学習コースコーディネーターの岡葉子教員に力添えいただいた。

⁴ 1日目に参加した12名のうち9名が2日目にもそのまま連続して参加した。ワークショップは2日間連続した内容で実施するため、基本的にどちらの日も参加することとして参加者を募集した。2日目だけ新たに参加したという参加者はいない。

⁵ 全学日本語プログラムのレベルコード(100～800)で示している。100(初級)レベルは日本語未習から開始し、1学期間で初級を一通り終了する集中コースである。200(初中級)レベルも初級後半から開始される集中コース、以下300～400レベルが中級、500レベルが中上級、600～700レベルが上級、800レベルが超級となっている。300レベル以上は、基本的に総合クラスと技能別クラス(読解、聴解、口頭表現、文章表現など)がレベルごとに開講されており、受講者はそれぞれのニーズあるいは留学カテゴリーの履修要件等に当たって受講科目を選ぶ。

ワークショップの内容や実施手順については、2014年に全学日本語プログラム中上級レベル文章表現コースの一環として行った「辞書を上手に使いこなそう：スキルアップワークショップ」(鈴木・高野 2015)の内容も参考とした。

ワークショップを実施したCAI教室には、ノートパソコンが6台ずつ設置された大テーブルが複数台ある。当日はおよそ日本語のレベルごとに場所を指定することとし、参加者には3つのテーブルに分かれて着席してもらった⁶。比較的大きな教室であったため、担当者はマイクを使用し、教室前方のスクリーンに要点を示しながら進めた。図1にワークショップ当日の教室のようすを示す。



図1 ワークショップ当日の教室

参加者にはふだん使っている辞書(電子辞書、スマートフォンのアプリケーション、オンラインウェブサイト等)を使用しながら順次課題を行ってもらった。課題ごとに同じテーブルについている参加者どうしで情報交換をする時間を設け、さらに担当教師がとりまとめた上で、全体にフィードバックする時間も設定した。

3. ワークショップの流れと内容(1日目)

3.1 1日目の流れ

以下、表1にワークショップ1日目の流れと内容を示す。

⁶ 実施前に、参加申込み者の氏名、日本語レベル、国・地域等の情報を得ることができたため、準備をしておくことができた。教室前方に初級～初中級レベルの参加者に着席してもらった。

表1 「辞書を使おう」ワークショップの内容(1日目)

●「辞書を使おう」ワークショップ(1日目)	
■イントロダクション ワークショップの目的と内容を説明	計10分
■課題1：辞書の使い方について振り返ろう ・辞書使用について「質問シート」記入 ・情報交換(グループワーク)	計30分
★目標：自分の辞書の使い方を振り返る ほかの人の辞書の使い方を知る	
質問シートに基づき、お互いの辞書使用状況について情報交換 ・日本語で文章を書く時、どんな辞書を使っているか 辞書のタイプ(電子辞書、辞書アプリケーション、オンライン辞書等) 辞書の種類(英和・和英辞典、国語辞典、その他の言語の辞書等) ・辞書を使用していて、不便だと思うこと、困ることはないか ・辞書を使用する際に、気をつけていることや工夫していることはあるか	
■課題2：辞書を使って表現を直してみよう ・説明(プロセス・メモの書き方を含む) 10分 ・各自で作業 40分 ・グループでシェア 20分 ・全体でシェア 10分	計80分
★目標：プロセス・メモを記入しながら、辞書を使う過程を意識化する	
・修正が望ましい箇所に下線を付した短文課題(4題のうち2題を指定)： 辞書を使用しながらよりよい表現に直す。辞書使用のプロセスを各自メモする ・どんな辞書をどのように使って、どのようなよい表現を見つけたか、報告する	

3.2 1日目の内容について

3.2.1 使用辞書

課題1では、ふだんの辞書の使い方について振り返ることを目的とした。質問シートでは、まずふだんどのような辞書を使っているか、辞書のタイプや種類についてチェックする項目がある。さらに、複数の辞書(違うタイプや違う種類の辞書)を使っているか、調べたいことが十分にわからなかった場合に調べる言葉

を変えて調べ直しているか、辞書の例文を見ているかなど、その使い方についてチェックする質問項目もある。また、辞書を使う時に不便だと感じること、自分で気をつけていることや工夫していることがあるかどうかも問うている。一通り質問に答えた後、同じテーブルに着席しているメンバー間で互いに報告し合う時間を設けた。参加者は、活発に意見交換を行っていた。

参加者が日本語で文章を書く時によく使うと回答した辞書は、以下の表2の通りであった(複数回答可)。

表2 ワークショップ参加者がふだん使用する辞書(1日目の参加者全12名)

辞書のタイプ	スマートフォンやPCの辞書アプリケーション	9名		
	ウェブ上でアクセスできるオンライン辞書	9名		
	電子辞書	6名		
	その他：書籍タイプの辞書	2名		
	検索サイトや百科事典サイト	3名		
辞書の種類	英和辞典	9名	和英辞典	8名
	国語辞典	6名	伊日・日伊辞典	3名
	西日・日西辞典	1名	韓日・日韓辞典	1名
	日本語-ミャンマー語辞典	1名		
	日漢大辞典	1名	類語辞典	1名

電子辞書を使用していると回答した6名に対して、スマートフォンなどの辞書アプリケーションを使用していると回答した参加者が9名と上回っている。オンライン辞書の使用者も9名と多い。内訳を見ると、電子辞書だけを使用していると回答した参加者が1名(日本語上級2レベル)、スマートフォンのアプリケーションだけを使用していると回答した参加者が1名(初中級レベル)、電子辞書とスマートフォンのアプリケーションの双方を使用し、自室では書籍タイプの辞書も使用していると回答した参加者が1名(初中級レベル)、電子辞書とオンライン辞書とを併用していると回答した参加者が2名(中上級、上級1レベル各1名)、スマートフォンのアプリケーションとオンライン辞書とを併用していると回答した参加者が4名(初中級2名、初級および中級1レベル各1名、初中級レベルのうち1名は書籍タイプの辞書も使用しているとのこと)、電子辞書とスマートフォンのアプリケーション、およびオンライン辞書の3タイプの辞書を併用していると回答した参加者が3名(いずれも中級1レベル)であった。今回のワークショップ

ブ参加者の中では、スマートフォンのアプリケーションとオンライン辞書を併用しているという参加者が4名と最も多く、さらにそれに電子辞書を加えた3つのタイプの辞書を使用しているという参加者も3名と多かった。

辞書の種類で見ると、韓国語母語話者が韓日・日韓辞書を、中国語母語話者が日漢大辞典を使用していると回答したほか、イタリア語母語話者が伊日・日伊辞典、スペイン語母語話者が西日・日西辞典をそれぞれ使用しているとの回答であった。英和・和英辞典は、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、インドネシア語、ミャンマー語の各母語話者が使用しているとの回答であった。ミャンマー語母語話者1名は、英日・日英の辞書アプリケーションのほかに「Japanese to Myanmar dictionary」(日本語-ミャンマー語辞典)も使用していると回答している。また、国語辞典を使用していると回答した参加者は、初中級～中級レベル3名、および中上級～上級レベル3名と、日本語レベルには限定されなかった。

3.2.2 短文課題：辞書を使って表現を直す

次に、課題2では、修正が望ましい箇所を下線を付した短文について、それぞれの箇所をよりよい表現に直すという課題を行った⁷。必要に応じて、辞書を使うこととした。その際、どのように辞書を使ったか、その過程を振り返ることができるように、辞書を使う過程を「プロセス・メモ」⁸にとりながら、行うこととした。参加者はかなり熱心に課題に取り組んでおり、この課題には、予定していた時間よりも多くの時間をかけることになった。結果的には、この段階で時間をかけたことは、翌日の振り返りの内容を充実させることにつながったと思われる。この課題2で参加者が記入したプロセス・メモは1日目のワークショップ終了時に提出してもらい、ワークショップ担当者がそれぞれの参加者の辞書検索過程を確認した上で、翌日の振り返りの準備を行った。1日目のプロセス・メモは2日目に各参加者に返却した。

⁷ 鈴木・高野(2015)でも述べられているように、このタイプの短文課題は、例えば自身の文章表現について不自然な箇所を指摘された場合に、どのようにそれを直していけばよいか、辞書を参考にしながら考えるという状況に近いものである。

⁸ 鈴木(2016)で使用したプロセス・メモ(鈴木・高野(2015)で使用された形式を改良したもの)と同様の形式とした。まず最初に調べた語・表現は何かを記入し、使用した辞書、記載されていた語句や参考にした例文などを順次簡潔に記入するようになっている。メモのとり方は、教室前方スクリーンに例を表示しながら説明した。

4. ワークショップの流れと内容(2日目)

4.1 2日目の流れ

以下、表3にワークショップ2日目の流れと内容を示す。

表3 「辞書を使おう」ワークショップの内容(2日目)

●「辞書を使おう」ワークショップ(2日目)	
■ 1日目の振り返り	計 20分
課題2で観察された辞書の使い方の工夫の確認	
・ 複数段階の検索(検索対象語を変えて調べ直すことを含む)	
・ 複数辞書の検索(英和辞典と和英辞典、英和辞典と国語辞典など)	
新しい検索方法の提案と検索サイト例の紹介	
・ 句単位の検索(格助詞を含めた名詞句での検索など)	
・ コロケーション検索	
■課題3: 辞書を使ってよい表現を考えよう	計 70分
・ 説明	5分
・ 各自で作業	50分
・ グループでシェア	15分
★目標: 辞書の使い方を工夫しながら、よい表現を探す	
・ 空欄に適切な語句を入れる短文課題(全12題のうち3題を自由選択): 辞書を使用しながら、よい表現を探す。辞書使用のプロセスを各自メモする	
・ どんな辞書をどのように使って、どのような表現を見つけたか、報告する	
■課題4: 作文を書いてみよう	計 20分 (予定時間は60分)
★目標: 実際に文章を書く時に、辞書の使い方の工夫を実践してみる	
・ 400字作文(原稿用紙に手書き)(予定時間はとれず途中まで実施)	
・ 作文テーマは「私の回りの最近のニュース」あるいは「1年間外国に住むチャンスがあったら、多くの国に行きたいか、1つの国にだけ長くないか」についての意見文	
■まとめ: 振り返りシート記入	計 10分

4.2 2日目の内容について

4.2.1 1日目の振り返り：辞書の使い方の工夫のまとめ

1日目の課題2に、予定していたよりも多くの時間をかける結果となったことを受け、2日目の最初に行った前日の課題2の振り返りについても、全体でシェアすべき内容は予想していたよりもふくらみが生まれた。

ここでは、辞書の使い方の工夫について、主として3つの点を確認した。まず複数段階の辞書検索プロセスについて確認した。これは、既にほとんどの参加者が行っていると言える方法であるが、例えば、「体力が{なくなった/落ちた/衰えた/低下した}」ということを表現したい場合に、まず和英辞典などで「体力」という語から検索を行うと、その用例などから上記{ }内に見られるようないくつかの述語候補が見つかる。その場合、それらの述語候補となる語を同様に辞書で順に検索し、その意味・用法を確認していくという複数手順を踏むものである。必ずしもすべての候補を検索する必要はなく、訳や例文などを参考にして、見当をつけてから確認することも可能である。同様に、「{重い/重大な/深刻な}病気」というような表現を探したい場合でも、「病気」から検索を始めたなら、{ }内に見られるような候補となる形容詞表現についてさらに辞書で確認するという手順を踏む。まずこの点を全体でシェアし、確認した。

また、このことは、言い換えれば、ある表現を探したい時に、述語とその補語の名詞句、修飾句と被修飾句など、互いに統合関係に立ち表現を構成する複数の語について、検索対象とする語を相互に変えてみるということであるとも言える。例えば上記の「{重い/重大な/深刻な}病気」のような表現の{ }にあたる語を探したい時に、英語あるいは自分の母語で探したい表現に当たる“serious”（あるいはそれに相当する語）から検索を始めることもできるし、日本語で「病気」を検索してみて、それを修飾する語句にどのようなものがあるかという方向から確かめることもできる。

次に、複数辞書の検索について確認した。これも、参加者の何人かは既に行っていたことであるが、例えば、英和辞典や母語と日本語との二言語対訳辞書を使って日本語の表現を探した後、候補となる日本語の言葉を、今度は逆に和英辞典などで確認し直したり、あるいは国語辞典を使ってさらに確認するという方法である。例えば、「考えているうちに、答えは本当にこれでいいのだろうかという_____が生まれてきた」の下線部にあてはまる表現を探したい時、英語（あるいは母語）と日本語との対訳辞書で“question” “doubt”（あるいはそれに相当する

語)などを検索すると、「質問／疑問／問題／疑い／疑惑／疑念」などの候補が見つかる。それらの語を、今度は辞書の種類を変え、和英辞典や日本語と母語との対訳辞書、あるいは国語辞典などで検索し、その意味・用法を確認するというものである。これは、「検索のプロセス」という観点から見れば、上記の「複数段階」の検索を行うことであると言うこともできるだろう。ほかに、「**重い／重大な／深刻な**病気」という表現を探したい場合に、例えば“serious”から検索すると「**重大な／深刻な／本気の／真剣な／真面目な**」などの語が候補として見つかる。それらの候補について、さらに和英辞典や国語辞典などで確認していくわけだが、もちろんすべての候補を検索しなくとも、例文の文脈などを参考にして、ある程度見当をつけた上で確認することも可能である。

さらに、ここでは、句単位で検索するという検索方法の工夫について、ワークショップ担当者のほうから情報を提示した。これは、例えば上記の「**体力が**なくなつた／落ちた／衰えた／低下した」という表現の述語部分の表現を探したい場合に、「**体力**」という語単位で検索することももちろん可能だが、格助詞「が」を含め「**体力が**」という単位で検索してみるというものである。このことで、「**体力が**」に続く述語部分の候補をより絞り込むことができる。ただし、すべての辞書でこのような検索方法が使えるわけではないため注意が必要である。このような検索方法が可能な日英対訳のオンライン辞書サイトを紹介したところ、次の課題3からは、多くの参加者が熱心にそのサイトを使ってみる様子が見られた。あるいは、候補となる述語動詞について既に見当がついている場合などには、例えば「**体力が衰える**」のように述語動詞までを含めた単位で検索を行うこともできる。ただし、この方法ではほかの述語動詞の可能性を見ることはできないため、候補となる表現を探している段階では適当な方法ではないかもしれない。また、これに関連して、名詞句と動詞句などの適切なコロケーションを検索することのできるオンラインツールもあわせて紹介した⁹。

⁹ ここでは「NINJAL-LWP for TWC (NLT)」(<http://nlt.tsukuba.lagoinst.info>)を取り上げた。このツールでは、例えば、名詞「疑問」という語から、「疑問を…」(「疑問を持つ」「疑問を感じる」「疑問を抱く」など)、「疑問に…」(「疑問に思う」「疑問に|思って/感じて/答えて|いる」「疑問に答える」など)、「疑問が…」(「疑問がある」「疑問が|出て/わいて/起こって|くる」「疑問が残る」など)のほか、「形容動詞語幹+な+疑問」(「素朴な疑問」「新たな疑問」など)、「形容詞基本形+疑問」(「強い疑問」など)、「疑問点」のような合成語、「一つの疑問」「いくつかの疑問」「最大の疑問」など他の名詞との共起というように、「疑問」という語の文法的振る舞いや種々の語との共起関係を包括的に確認することができる。

4. 2. 2 短文課題：辞書を使って表現を考える

課題3は、短文の空欄に適切な語句を書き入れる課題である¹⁰。写真を見て、様子を描写するように求めた課題も含めた¹¹。参加者の日本語レベルを考え、初級後半レベルから上級レベルまで全12問用意し、参加者それぞれに3題ずつ選んで取り組んでもらった。前述の「振り返り」の段階で新たに情報を得たオンライン辞書サイトを実際に使ってみるなど、それぞれの参加者は熱心に取り組んでおり、ここでも、予定していたより長めの時間をとることとなった。グループにおけるシェアも積極的に行われていた。

最後の課題4では、総まとめとして400字程度の作文課題を準備していたが、結果的には時間内に作文を終えることはできなかった。作文を送付してもらえれば、添削の上返却することとし、ワークショップ担当者の連絡先メールアドレスを通知した¹²。

4. 3 ワークショップの評価

ワークショップの最後に記入した振り返りシートでは、各質問項目に対する回答状況は以下のようにになっている。

検索対象のデータは日本語のウェブサイトで収集した11億3800万語とされ、表示される各例文は元のウェブページにリンクされており、必要に応じて実際の使用文脈を確認することもできる。ただし、詳細な情報が得られる一方、英訳などは特に付されていないため、どんなタイプの学習者にも一様に薦められるというわけではないかもしれない。このツールについては、寺嶋(2016)で、学習者のコロケーションの選択において通常のオンライン辞書との併用の効果が検証されている。

¹⁰ もちろん、実際の言語運用において、空欄の設定されている文に語句を挿入するという形で文章を作成することはないだろうが、練習問題であるという性質から、このような形式の課題を設定している。

¹¹ 鈴木(2016)の調査で扱われている短文課題を参考にし、「湖は、美しかった。鏡のような水面に、_____。」(写真を見て、湖に景色が映っているようすについて説明するもの)、「隣の人との間を少し_____たら、あと二人すわれそうだ。」(写真を見て、電車内のようすについて説明するもの)のように、写真で示された状況を日本語で説明するというタイプの練習課題も交えた。

¹² 実際に2名の参加者からその日のうちに作文が提出された。成績などのつかない自由参加型のワークショップであるため、課題はなるべく時間内に完結するようにするべきであったという反省点がある。

表4 振り返りシートにおける質問への回答状況(2日目の参加者全9名)

質問項目	はい (人)	いいえ (人)	どちらとも 言えない (人)
1. 自分がふだんどのように辞書を使っているか、わかった。	9	0	0
2. ほかの人がどのように辞書を使っているか、知ることができた。	8	0	1
3. 1つだけではなく、2つ以上の辞書を使うといいことがわかった。(たとえば、和英辞典と英和辞典、英和辞典と国語辞典など)	9	0	0
4. 調べる言葉を変えるのも、いいやり方だとわかった。 (たとえば、「手紙を_____? _____」を調べたい時、「send, mail」からさがしてもいいし、「手紙」からさがしてもいい)	9	0	0
5. オンライン辞書を使って、フレーズで調べるやり方もあることがわかった。(たとえば、「手紙を_____? _____」を調べたい時、「手紙を」 「手紙を送る」で調べる)	9	0	0

質問1と2は、今回のワークショップの達成目標のうち「自分の辞書の使い方を振り返る」、および「ほかの人の辞書の使い方を知る」について確認した項目である。「ほかの人の辞書の使い方を知る」ことができたかについて「どちらとも言えない」という回答が1名あった。ワークショップでは、辞書の使い方の工夫について全体でシェアしながら進めていった。その中には自分が既に行っている工夫点もあれば、行っていない工夫点もあることが考えられる。このような様々な「工夫点」を知るという意味で「ほかの人の辞書の使い方を知る」ことも目標に含めていたものである。しかし、その意味するところ、および意義をより明確にすべきであると思われる点で、この目標項目の立て方は再考の余地があるかもしれない。

質問3から5は、ワークショップの中で具体的に確認した検索方法の工夫である。同じくワークショップの達成目標のうち3つ目の「辞書の使い方の工夫を知る」について確認した項目である。課題の結果について全体でシェアする際にももちろん個々に取り上げたが、特に2日目の始めに1日目の振り返りの時間をと

り、辞書の使い方の工夫についてまとめを行った。ここで取り上げた工夫の各点について、2日目の全参加者が「わかった」としている点から、今回のワークショップで設定した目標はほぼ達成できたと考えてよいと思われる。

ほかに自由記述のコメント欄では、「辞書の使い方について振り返るのはおもしろかった」「使い方がよくわかるようになった」というコメントのほか、本ワークショップで、具体的に句単位で検索可能なオンライン辞書サイト、およびコロケーションを確認できるサイトについて紹介した点について、「よかった」「役に立つ」と記した参加者が計5名あった。また「練習問題が興味深かった」というコメントもあった。

5. まとめと今後の課題

本稿では、2016年度夏学期に東京外国語大学全学日本語プログラム「自律型学習コース」で行われた『辞書を使おう』ワークショップについて、その内容を報告した。

今回のワークショップ参加者は、延べ21名のうち16名が初中級～中級レベルの日本語学習者であった。鈴木・高野(2015)では、中上級レベルの学習者を対象に辞書使用のスキルアップを目指したワークショップが行われているが、同様のワークショップは、初中級～中級レベルの日本語学習者を対象として実施することも十分に可能であることがわかった。参加者の日本語レベルに幅がある場合には、ワークショップで扱う課題について、それぞれの日本語レベルに合致するよう複数のものを準備しておく必要があるが、それ以外の点においては、ワークショップの実施そのものには特に支障はなかった。ワークショップ中の参加者のようすや、その提出シートの内容からも、初中級～中級レベルの学習者が非常に熱心に課題に取り組み、2日間の日程においてワークショップの目標を達成したことがうかがえた。

また、ワークショップにおいては、種々の課題を行い、実際に体験してみるということももちろん意味があるが、「振り返りシート」を見ると、具体的な検索サイトやツールを紹介してもらったことについて評価するコメントが複数見られた。このことから、ワークショップ参加者にとっては、より具体的な成果として、便利なツールを新しく知ることができたなど、これまでにない「新しい」あるいは「役に立つ」情報を得たということが大事なポイントになるのではないかと考えられる。今後、このようなワークショップを企画する際に、この点について、

どのような具体的な成果を設定することができるかが課題となるだろう。また、ワークショップの参加者がどのようなツールを使用していて、どのような検索方法をとっているかなど、実際にワークショップが開講されて初めてわかる情報も多い。それらに臨機応変に対応するというのも、ワークショップ実施にあたって必要な要件となる。

また、辞書の使い方の工夫において、今回は特に注目して扱うことができなかったが、類義語を手がかりに目指す表現を探していく方法についても、次回はぜひ取り上げたいと考えている。

引用文献

- 鈴木智美 (2016) 「日本語学習者は辞書からどのように言葉を探すのか—中級・中上級日本語学習者7名の辞書使用についての調査事例報告から—」東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』第6号 pp.1-23
- 鈴木智美・高野愛子 (2015) 「中上級日本語学習者の辞書使用—作文時の辞書使用の詳細調査と文章表現のための辞書使用スキルアップを目指すワークショップ実践報告—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第41号 pp.137-156
- 寺嶋弘道 (2016) 「日本語学習者のコロケーションの選択とその考察—DIC法とDIC-LP法の比較から—」『日本語教育』163号 pp.79-94
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (2016) 『全学日本語プログラム履修案内』(2016 Fall Quarter)

Report on a Workshop for Developing Skills for Dictionary Use: Pre-Intermediate to Intermediate Japanese Learners

SUZUKI Tomomi

Key Words: Dictionary Application, Smart Phone, Online Dictionary,
Electronic Dictionary, Searching Noun Phrases and Collocations

The purpose of this paper is to report on a workshop for developing Japanese language learners' skills for using dictionary tools, held in the 2016 summer quarter at JLPTUFS (Japanese Language Program of Tokyo University of Foreign Studies).

The workshop was held over two days, two hours each. The total number of participants was 21. Among those 21, 16 participants were pre-intermediate to intermediate Japanese learners. Participants worked on tasks related to dictionary use. They had to correct expressions or find the most suitable word or expressions by using dictionary tools, and to write short compositions by applying the skills of dictionary use learned during the workshop.

In the workshop, I emphasized the following three points when searching words and expressions using dictionary tools:

- (1) Check in detail the words and expressions found in dictionaries at the first search (i.e. Check in detail the possible predicate words one by one found in dictionaries by looking up the complement noun, or the possible modifiers after checking the modified nouns.)
- (2) Check more than one dictionary (i.e. English-Japanese, Japanese- English dictionary, or Bilingual Dictionary and Monolingual Dictionary) to verify the usage.
- (3) Find the appropriate predicative verb by checking the complement noun with the particle, and pay attention to the collocation of those words.